

編集後記

2012年は沖縄の日本復帰40周年の記念の年であった。しかし、復帰を祝うにはあまりにも沖縄の人々を苦しめる問題が山積していた。オスブレイの沖縄配備については言うまでもなく、普天間飛行場の名護への移設問題、相変わらず発生し続ける在沖米軍兵士の犯罪、さらには尖閣諸島をめぐる日中対立の激化など、沖縄を取り巻く情勢は厳しくなりこそすれ、決して和らぐことはなかった。これでは素直に日本復帰を祝う気持ちにはならないだろう。

戦後の米軍統治下で巻き起こった日本復帰運動。「平和憲法」を掲げる日本に復帰すれば米国と対等に交渉ができる、沖縄から基地はなくなり平和が訪れる。そう信じて復帰運動を闘った沖縄の人々から見れば、1972年に実現した復帰がそもそも自分たちの望むような復帰ではなかったということは当時から繰り返し指摘されてきた。すでによく知られているように、今や沖縄に存在する米軍基地は在日米軍の75%までに膨れ上がっている。「沖縄の中に基地があるのではなく、基地の中に沖縄がある」と言われる所以である。

いったい、沖縄の日本復帰とは何だったのか。このことの意味をあらためて見つめ直さなければならぬ。そう考えさせられた復帰40周年であった。

さて、今年度の活動について振り返っておこう。

第1に、今年度は学外からの研究者をお招きしての公開研究会を2度持つことができた。お一人は石上英一氏（東京大学名誉教授）である。研究会は2012年5月11日に開催され、報告タイトルは「奄美群島編年史料集（近世編）編纂の試み」であったが、驚くべきことに用意されたレジュメと資料はA4判裏表の両面刷りであわせて150枚を超える前代未聞の膨大なものであった。間違いなくこの記録は破られることはないであろう。

もうお一人は加藤正春氏（ノートルダム清心女子大学教授）である。研究会は2012年12月8日に開催され、報告タイトルは「沖縄墓制研究と両墓制―柳田国男の両墓制論をめぐって」であった。加藤氏も詳細なレジュメと資料を用意されたが、研究会前日にやや強い地震が発生したため来聴者が少なかったことは、地震に怒ってもしようがないのであるが、残念であった。

お二人の御報告内容については本号に掲載されているので、ぜひ御一読いただきたい。

第2に、本共同研究のメンバーが中心となって昨年度開講された本学の生涯学習「知りたいっちゃ沖縄、行きたいっちゃ沖縄」が今年も開講された。2回目にして「恒例」となった沖縄ツアーは2012年12月20～23日の予定で実施され、13名の参加を得た。今回の目玉は久高島探訪であった。参加者は、気温が20度を超える真夏のような晴天の下、犬飼公之氏（本学名譽

教授)の案内で沖縄の原風景ともいえる久高島を満喫した。その他、旧海軍司令部壕や糸数のアブチラガマで沖縄戦について学び、中城城と護佐丸の墓を訪ねて第一尚氏王朝の歴史に思いを馳せた。また、門中墓を訪ねたことは沖縄の葬制を学ぶよい機会となった。この講座については2013年度も開講する予定である。

第3に、本共同研究の発足時からメンバーとして沖縄研究の一端を担ってきた岩川亮准教授が定年退職を迎えたことである。岩川氏には2013年1月31日に共同研究の報告会で「最終講演」として沖縄を含む南島への思いを存分に語っていただいた。それについては本号に掲載されているので御一読をお願いしたい。

冒頭に記したような沖縄をめぐる諸問題は簡単には解決しそうにないが、平和を希求することをあきらめてはいけないし、その歩みを止めてはいけない。今こそ政治の英知が求められる時であるが、その政治を平和の実現に向けて動かす努力を我々も忘れてはいけない。

(文責 今林直樹)